学びに新しい「挑戦」と「観点」を。 vol.8 2007年9月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2007年9月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2－15－5 http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

Mail Seminar

感情の論理 vol.7 「闇夜のクレバス」

夏期講習も終り、各塾ではホッと一息といった時期でしょうか。私は、９月５日の広島・山陽女学園での講演を皮切りに、秋のセミナーシーズンに突入しました。あなたと、どこかの会場でお会いできることを期待しています。

今回は広島でのセミナーでお話したことの中から、重要な部分をダイジェストでお伝えします。

この９月から３ヶ月の間に来春に向けた塾改革をしてほしいのです。今、来春に向けた戦略構築をしなければ、何も変わることのない一年を過ごすことになってしまいます。12 月になると、冬期講習、受験と矢継ぎ早に重要イベントが続き、戦略構築どころではなくなります。人は、忙しくなると頭が働かなくなるものです。

「仕事に追われるのは構わないが、作業に追われてはならない。」

仕事とは「あなたにしかできないこと」であり、作業とは「時給 800 円のパートのおばちゃんでもできること」です。戦略構築は経営者である「あなたにしかできないこと」の筆頭です。

ところが、多くの塾経営者が「作業」に追われ、本来の仕事をできずにいます。ぜひ、今の時期に塾の全てを見直してください。

キーワードは「闇夜にクレバスを跳べるか」です。

前進を続けてきたあなたの前に、大きなクレバス (氷の裂け目) が横たわっています。暗闇でどれほどの幅があるのかが分かりません。ほとんどの人は安全を考えて引き返してしまいます。しかし、「えいっ!」と跳んだ人だけが新しい世界へ行くことができます。もちろん、向こう岸に届いた人の何倍もの人がクレバスに落ちたことでしょう。ライト兄弟の飛行成功以前には、数え切れない屍が存在しているのです。

ビジネスでも同じです。

どんな業種でも、成功した経営者はどこかでクレバスを跳んでいるものです。あなたにも更なる飛躍のためには避けて通れないクレバスが横たわっています。

小さな例を挙げると次のようなことです。

保護者を集めた教育セミナーをしましょうと提案すると、少なからぬ塾長が二の足を踏みます。

「うちの塾では教育セミナーを開いても２～３人しか来ないかもしれない。」

そんな理由で実行を躊躇 (ためら) っています。いわゆる「クレバスを跳べない」状態です。多くの人が、こうしたイベントの成否を参加者数で測りますが、それは間違いです。たとえ 100 人が参加したとしても、役に立たないセミナーをした場合は、悪評が 100 倍速く拡がるだけです。

逆に、参加者が一人でも、その人のために一所懸命にお話をして感動してもらえれば、その評判は必ず地域に伝わるものです。参加者数が少ないことを恐れて「クレバスが跳べない人」は、その機会を永遠に失ってしまいます。

かつてのように、売り手市場の頃はクレバスを跳ばなくても「こちら側」の領域が自然に拡大していました。しかし、縮小均衡に転換した現在では、向こう岸に飛ばなければ今の立ち位置さえ危うくなります。今は「変化するリスク」よりも「変化しないリスク」の方が大きくなっているのです。

まずは、入塾案内・チラシ・ホームページの見直しから始めてください。器 (うつわ) を見直すことで、中身の問題点が浮き彫りになってきます。来年度の成否は、これからの３ヶ月の過ごし方に掛かっています。

全国学習塾援護会 森 智勝

今月の気になるハナシ

小学英語教育の今後

今回の小学校の指導要領改訂におけるポイントのひとつに、「英語（外国語）活動」の導入があげられます。始まる、始まるといわれ続けて、早何年でしょうか。少しずつ進展していた「小学校での英語教育」。ついに本格導入となるのでしょうか？

１．なぜ今回の改訂素案に「英語活動」が入ったのか？

今回、小学校でも英語（外国語）活動を本格化させる契機となったのは、現行の指導要領が実施されたためです。現行の指導要領から導入されているのが、総合学習　――　そう、「総合的な学習の時間」です。この総合学習のウリは、［生きる力］の育成を目指し、各学校が創意工夫を生かして、これまでの教科の枠を超えた学習などができること。つまり、数値評価をするための教科・授業時間ではないため、各校によって何をするか、どこまでするかが、自由に決められます。そのため、総合学習の時間内で、国際理解という名目で英語を教えても、なんら問題はありません。

しかし逆にいうと、全ての学校で英語を教えても、各校によって取組みに差があり、習熟度にバラつきがでることになります。これは「教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続の観点」からすると、好ましくない状況です。そこで、高学年で「英語活動」を新設し、週１コマ程度を全国一律に実施することを決めたのです。

２．小学英語は、点数評価する？しない？

文科省は今月１０日、小学校の「英語活動」について、“検定教科書を使わず、数値評価もしない”という案を中教審に提出したようです。特に反対意見もでておらず、「英語活動」は、教科ではなく現行の「道徳の時間」や「総合的な学習の時間」と同じ扱い・位置づけとなる見込みです。

文科省の案によると、小学校の「英語活動」は、「幅広い言語に関する能力や国際感覚の基礎を培う」ことが目的で、「中学校の英語教育の前倒しではない」そうです。そのため、教科のように数値評価すべきではなく、検定教科書をつかわず、国として共通教材を提供することが必要としています。

３．検定教科書ではない、共通教材の配布

文科省は、小学校の英語教育につかう教材として「英語ノート」を作り、２００９年春から、全国の５，６年生とその担任に配布する方針を固めました。０９年度春に小学校に配布するため、０８年度の概算要求に、英語ノート関連で４億円以上を計上しています。

「英語ノート」は、ＣＤつきのワークブック形式になる予定で、ノートには「英語活動」で教える内容を盛り込む見通しです。文科省は、「英語活動」が始まるまでは、「総合的な学習の時間」でつかうことを想定する一方、正式導入後も、共通教材を提供することを検討しています。２０１１年の春から、正式に「英語活動」が導入されるのであれば、今回作成予定の「英語ノート」が、共通教材のベースとなることは間違いありません。

雑　感

これまでの文科省の一連の動きを見ると、いよいよ「小学英語教育」に本腰を入れたと見るべきでしょう。これまでに文科省が配布した教材には、道徳の副教材として作成した「心のノート」があります。

一方、「英語ノート」は副教材ではなく、主教材です。文科省の本気度が垣間見えるような気がしませんか。「数値評価しない」としているのも、現職の小学教員が、英語教育のノウハウを持っていないためでしょう。

英語教育専門の教員を養成するのか、現職教員が兼任するのかなど、解決すべき点は多々ありますが、今後、指導要領の改訂作業が進むにつれて、徐々に具体化され、明らかになっていくと思います。